



Data

監督：深川栄洋
原作：芦村朋子『何日君再来』
出演：尾野真千子／向井理／岸本加世子／駿河太郎／イッセー尾形／成田偉心／野際陽子

■■■ショートコメント■■■

◆本作の原作は、芦村朋子の『いつまた、きみと 何日君再来』。これは2010年のNHK朝ドラ『ゲゲゲの女房』で主演した俳優・向井理が大学生の時に、親族と共に祖母である芦村朋子の人生の半世紀をまとめて自費出版した本らしい。2011年に中国語検定3級に合格し、今また2級に向けて勉強を開始している私は、中国語の「何日君再来」の意味がすぐわかるから、本作は中国との関連が深い映画かと思ったが・・・。

◆私はテレサテンの歌からも中国語の勉強をしているが、本作で高畑充希が歌っている主題歌「何日君再来」は、テレサ・テンをはじめ数多くの歌手によってカバーされ、長年多くの人々に親しまれてきた曲。当然、中国語の歌詞でタイトル通りの思いを歌った曲だが、なぜ、それが本作のタイトルになっているの？また、なぜ本作の主題歌に？

◆山崎貴監督の『ALWAYS 三丁目の夕日』3部作（『シネマルーム9』258頁参照、『シネマルーム16』285頁参照、『シネマルーム28』142頁参照）は、昭和30年代の、日本が豊かになり高度経済成長期に入っていく時代を描いた「前向き」の映画だった。それに対して本作は、昭和20年8月15日の敗戦によって中国大陸から日本に戻らざるを得なくなった芦村吾郎（向井理）・朋子（尾野真千子）夫妻が、昭和20年代の日本での動乱期をいかに生きてきたかがポイントになっている。

しかして、昭和30年代と昭和20年代の日本と日本人の生き方の相異は・・・？

◆私の故郷は朋子と同じ松山。私は昭和24年に松山市で生まれたが、赤ちゃんの時の丸々と太った姿を見ていると、栄養状態はすごく良かったようだ。すると、私の両親は昭和24年頃、本作にみる松山での吾郎・朋子夫婦のような苦労はしていなかったのかも・・・。松山の生活では、朋子の父親芦村忠（イッセー尾方）と朋子の夫吾郎との確執（？）が描かれているが、このストーリーはホントにホント・・・？娘と一緒に働き手となる吾郎が

中国大陸から戻ってきたのに「食いぶちが増えるだけ！」と怒る父親忠の気持ちが私にはサッパリわからなかったが・・・？

◆本作では、朋子を演じる尾野真千子の明るさと強さが際立っている。それに対して、向井理演じる吾郎は実直で有能そうだが、意外と失敗が多い。そのため松山の田舎での農作業生活はもとより、他の都市で一転して一から出直した後も、いろいろと苦労が多い。それはそれで仕方ないが、ある日、彼の口から出た「お前とも別れんと・・・」の言葉にはびっくり！こんな良くできた嫁さんに対して、一体どこからそんな言葉が出てくるの・・・？

◆平成末期の今の時代は豊かさに満ち溢れているから、昭和20年代の貧しい時代の日本を生き抜いた若夫婦の物語はたしかに珍しいかもしれない。本作は朋子の孫にあたる大学生の向井理が野際陽子演じる年輩いた朋子がパソコンで始めた手記の執筆作業を手伝うところから生まれたものだが、さて今の時代を生きる若者はそんな物語に興味を持つのか？

◆私が本作を鑑賞した劇場内の観客は年配者ばかり。すぐ近くではすすり泣く声も聞こえたが、これはきっと私以上の高齢者が昔を思い出しての涙だ。祖母の手記を出版した俳優・向井理の思いは私には理解できるが、さて「何日君再来」という中国語の意味も、終戦後の中国からの引き揚げの苦労も知らない今の若者たちは、本作をどう受け止めるのだろうか・・・？

2017（平成29）年6月28日記